

5月16日東洋ホテルでの

## 整備局の説明についての意見及び質問書

H15.5.16 大阪東洋ホテルにおいて行われた近畿地方整備局のダムのは是非についての説明の中で、淀川水系流域委員会の方々の提言とは反対に、5つのダムは必要との方向を示されたことについて歓迎している所であります。

説明会が5つのダムについてのものであった関係上でしょうが、提言が活かされていない事への不満と重なって、ダムを作ることそのものが悪い事のようになってしまう感じが拭えません。

私共が漁業関係者又は一流域住民として河川なりびわ湖なりを眺めます時に、私共なりに過去を振り返ってみて10～20年前と今の違いについて述べたいと思います。

- ① びわ湖の水位変動が降雨量如何に関わらず、大変な上下動をするようになって来ました。これに伴いびわ湖へ流入する河口の部分において、びわ湖へ更に河床が出て行く状態になって来ております。当然水産資源の産卵育成にも大きな影響が出るものと考えられます。
- ② 「年々日々刻々、びわ湖自体の水質環境が悪化していくのがわかる。」と言いついても決して過言ではない程の状態にあります。一つはバブル期に至る以前よりの林地伐採（林地開発は今日まで）。上流部より中流・下流に至る全ての流域においての、河川工事開発に関わる濁水流出問題等による二十年間からの蓄積が、今日のびわ湖水質環境悪化の要因の一つと思われます。
- ③ びわ湖へ注ぐ河川の殆どが、上流から中流域にて作成されている頭首口による取水（慣行水利権等々）の名の下に土地改良区が得ておられる水利権による取水。この上流より流入して来る素晴らしい水を主に農業用水として用いることにより、その排水が水田を通りびわ湖に注がれます。（4月中旬～5月下旬）その結果として富栄養化問題があります。田植え期の代掻き水がびわ湖の代表的な汚染源となっていることは、びわ湖周辺の住民なら殆ど知っている筈であります。

5月16日の委員会の後、5月20日のBBC・NHKの放送で、早速南湖

の方にて赤潮の発生が報じられていました。田植えが終わった頃より少し経過すると、富栄養化の代掻き水がびわ湖へ流入して、必ずと言っていいほどこの時期より赤潮が発生します。(湖の水温が低い年、表面水だけが急に温かくなる年、特に早く発生すると思われます。)赤潮発生メカニズムには、田植えの代掻き水のびわ湖流入が非常に大きく関係していると思いつつ、何年もの間びわ湖周辺にいながらそれを見つめております。

- ④ 戦後の食糧確保という観点より、びわ湖周辺にあった内湖の干拓事業の推進され、沈殿浄化型の内湖の埋め立てで、直接びわ湖へ濁水が流入するようになって来た事による水質環境の悪化。水環境改善を推進していく上では、昔あって今なくなったものを、どのように復元して行くかが重要であると考えております。
- ⑤ 当初、我々姉川水系漁業権者はダム建設に反対をしてきました。当時の説明は、「ダム建設はびわ湖総合開発の一環事業であり、国会を通過した承認案件である。又、その水質についても安全である。姉川下流については環境アセスメントの対象外である。」(H4年びわ町役場にてポーレンバイダシステム等の説明)との発言でした。その後、今度は建設省直轄の工事事務所が出来て、更にダム推進に向けた説明と同時に、その時々協議を行い各々サインをして残していく事で合意しました。更に建設省より水資源公団にダム工事が移管されることになり、水資源開発公団丹生ダム建設所と種々話し合いを重ねた結果、H11年4月よりH13年3月までの内に、丹生ダム建設所とその方面の学者の方々・流域の事情に詳しい方々を交えて委員会をもたれましたが、結局ここでも一級河川の流量を水利権にて取水されてしまうこと、水産資源の産卵期の流量不足による大量死、水産資源の枯渇問題が解決されないまま、今度は場所が淀川水系流域委員会に移ったと感じております。
- 淀川部会・びわ湖部会にも出来るだけ出席させて頂いて、その全てを聴聞できたわけではありませんが、委員の方々の話に耳を傾けているつもりであります。その中で、①～④で述べた事についてより深く言及されているのは、ダム問題が主体と思われます。私共の近くにはとりやめにはなったものの、関西電力の揚水発電ダム、スキー場開発、その前には姉川湖東ダム等々の工事がひしめき合って、姉川はH2～H13年までは濁水に悩まされ続けて来ている現状ですが、他のダム・工事等についてはほとんど触れられていません。

私共流域住民にとって、台風時における大增水はいつ洪水となるやも知れず、大変な恐怖を覚える所であり、治水利水に関しても水環境が大前提の計画を立てて考えていくべきではないでしょうか。余るほど水が無いと、「足りない」という苦情が土地改良区等に頻繁にあると聞き及んでいます。その要望に応える改良区でありたいと当局者は思われるようです。その一方で、排水口からは水が垂れ流しにされているのが現状です。水利権にまつわる管理監督は、その使用水の水環境はどうされるのでしょうか。公共事業等についても然りです。工事に伴う濁水発生をどのように処理するか、環境面についての協議管理監督を具体的に種々の提言をしてこそその委員会ではないかと考えます。更に高所から見て淀川水系の全般を視野に入れての提言がなされるべきではないでしょうか。

整備局が示された説明と委員会の基本的な考え方が違いすぎる構図ではなしにダム建設を行ったと仮定した時、そのダム湖の運営に関してより細かくより深く水及び周辺流域に関するその影響と環境問題を議論し、その専門分野の方々の委員としての提言が為されて行くのも一つの委員会の形ではないでしょうか。5月16日の説明によれば、殆どのダムにおいて用地買収は完了しているが、ダム本体工事については委員会の結論が出るまで着手せず、そのための調査検討をしていくとお聞きしましたが、そこに至るまでに道路・上下流域河川護岸等に投じられた資金は相当な額に上っていると聞き及びました。5つのダムを合わせると数百億～数千億を越えるような国費を投じた後に、ダム本体だけを残して委員会を開くとは、あまりにも矛盾していると思えてなりません。調査・検討をその度々に委員会に諮るとのことですが、ダム湖で飲料水に使用出来る水質が出来る所まで調査検討されるのでしょうか。すでに前記に記述しました通り、びわ湖そのものがダム化して稼働している状態の今日、早急に出来ることから水環境を改善していくべきと考えます。この流域委員会が発足するまでに、大変な年月を経過しています。この上更に、調査検討に時間ではなく年月をかけるのは、誠に遺憾であるといわざるを得ません。と同時にダムに関する例題なら全国に沢山あるのですから、その中でより良い物を用いる方法もあるはずです。一級河川本流に途中より水が無くなるような利水計画。異常気象もあいまって濁水時に流量のある河川づくりはどうしても必要かと考えます。

また、一流域住民の団体として、H5～H13年頃までに行われて来たダム工事に関する付帯工事としての道路工事・河川工事に関連して、濁水だけが下流へ流れ込み、我々漁業者は大変な被害を受けてきましたが、丹生ダム建設工事の中止又は工事延期という事態になった時、下流域漁業権者である私共の漁家経済に与えた被害をどのように考えておられるのか、お聞かせ願えますでしょうか。因みに委員会が発足してから工事中止が多く、本年度あたりは降雨によ

る濁水があってもその濁度も薄く、工事の間におきた濁水が流量の割に長い期間であったのと違って非常に早く薄い濁りとなり、昔の通常の降雨の増水パターンに近くなりつつあると思われます。工事による濁水の影響が、これほど下流域やびわ湖に繋がっているのかと改めて思い知らされている所であります。

最後に上記で申し上げた濁水が、全て丹生ダムとは申しません。姉川湖東ダム、奥伊吹高原スキー場の増設、高時川水系杉野川の関西電力の揚水発電ダム計画に付帯する道路工事、余呉高原スキー場の増設工事等もあって、尚且つ丹生ダムの付帯工事であります。

平成15年5月23日

姉川水系漁業被害対策委員会

委員長 鳥塚 五十三

